波紋　大規模養豚計画　霧島永水アセス始動　反対運動

環境破壊根強い懸念

南日本新聞　2010.08.24

霧島市の鎌田建設の関連会社、鹿児島農畜産研究公社（同市、鎌田善政社長）が同市霧島永水に建設を計画している大規模養豚場。「自然が破壊され、取り返しがつかない」と訴える住民らは、決起集会を開くなど反対の姿勢を強める。一方、同社は「環境影響評価（アセスメント）の結果で計画を決定したい」としている。県環境林務課によると、養豚場を対象にしたアセスは初めてで、今後の推移が注目される。（霧島総局・桐野秀吾）

昨年１１月に縦覧されたアセスの手段を示す方法書では事業計画として約１４５ヘクタールに、母豚８００頭を１ユニットとして１９ユニットを配置し、年間最大出荷頭数は３０万頭。総排水量は１日当たり１５２０立方メートルとなることなどが記されている。工事着工予定は２０１２年５月とされる。

県畜産課によると２００９年の県内の豚出荷数は約２０４万頭で全国１位。仮に３０万頭出荷すると、一ヶ所の養豚場では県内で最大となる（正しくは東洋１位）。

「排水や悪臭で自然が破壊され、観光にも影響が出る」として建設に反対する地元自治会や水利組合など１２団体は７月、「霧島大規模養豚場建設阻止連絡協議会」を設立。８月８日には霧島市役所前で決起集会を開き７５０人（主催者発表）が集まった。参加者は「霧島に公害施設はいらない」「未来の子どものために闘うぞ」と声を上げ、市中心部をデモ行進した。

参加した同市の会社員女性（２３）は「養豚場ができればにおいや川の汚染で今まで通りの生活ができなくなる」。３０代の会社員男性は「雇用が生まれるとも言うが、地元へのメリットがあるのか分からない」と話した。

同社はこれまでの住民説明会で「地元住民を中心にした雇用で地域を活性化させる」「環境に配慮した施設にする」などと説明している。

しかし、地元では「山村留学制度を始めるなど過疎化に歯止めをかけようと懸命に努力してきた」との思いが強い。永水小学校は、児童数の減少に対応するため１９９２年、県内で初めて留学制度を開始。自然の豊かさを売りに、本年度までに１４１人を受け入れている。

同協議会の構成団体は市議会に反対陳情を提出、継続審議となっている。２６日には協議会として県議会に反対陳情を提出する。

協議会の小濱公志会長は「ほかの養豚場がある場所を見ると、川が汚染されている。業者の営利のため、環境に負荷をかけることはやめてほしい」と建設中止を訴えている。